秋の夕暮れ白蛇

青山 黒美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
秋の夕暮れ白蛇

【Ｎコード】
Ｎ０４２１Ｑ

【作者名】
青山　黒美

【あらすじ】
自分は白蛇が何故か、気に掛かかっていた。
品田のオヤッサンが話す。白蛇の言い伝え。
物語断片に投稿しようと書き始めましたが、意外に長くなったので短編にしました。

「おっ！精が出るね～。」

畑仕事の手を止め、声のした方を振り向けば、品田（しなだ）のオヤッサンが顔をニンマリして立っていた。

「どうしたんです？良いことでもあったんですか？」

「わかる？これからアッツ～い酒をさ、飲みに行くところよ。」

ニンマリした顔を更に歪ませて、嬉しさの境地へと、品田のオヤッサンの顔は行く。

「いいですね～。寒くなって来ましたもんね。」

「寒いね～。ウチのボロ屋なんかよ。寒くて、寒くて、外の方があたっけーくれーよ。」

「あはははは。」

「ところで親父さんの具合はどうだね？」

「お陰様で、食も喉を通りますし、だいぶ善くなりました。」

「いや～。親父さんと、また一杯やりたいね～。」

「ええ。伝えておきますよ。」

自分は、あの白蛇の事が妙に気に掛かり、聞いてみたくなった。

「俺、こないだ此の畑で白蛇を見たんです。それが凄く大きくて。」

言い終わった瞬間、品田のオヤッサンの顔から笑顔は消え、訝しそうに自分を見る顔へと、豹変させた。

「白蛇……白蛇の眼は見るな…。」

「え？」

「白蛇の眼は見てねーだろうな。」

一瞬ドキッとしたが、すぐに理由を聞いてみたかった。

「何でですか？」

「オメーは親父さんから聞いてねぇか？」

「知らないです。」

品田のオヤッサンは重い口調で話し始めた。

「この土地の昔からの言い伝えだ。白蛇の眼を見るな。見たら、おっちんぢまう。すぐさま逃げろってさ。」

自分は唾を飲み込んだ。

「昔な。この土地が日照り続きで、雨がいっこうに降らねー、日が何ヶ月も続いた事があったらしい。それでな、百姓共は困ったてん

で、町から霊媒師を呼んだんだよ。」

「霊媒師はな。この土地は呪われている。日照りが続くのは、そのせいだ。生け贄が必要だってんで、百姓共は驚いたよ。更に霊媒師は言ったんだよ。生け贄には、若い美しい女でなければいけないってさ。」

「美しい女…。」

自分は独り言の様に呟いた。

「そうだよ。そこで、この村で一番の美人だと噂だった女が選ばれた。可哀想になぁ、まだ十五、六だってんだからなぁ。しかも、縁談も決まっていて、町の名のある屋敷の息子だってんだから。」

「で、女はどうなったんですか？」

「…殺されたよ。霊媒師の言う通りに山の中のお社でな。」

自分は早く白蛇の事を聞きたいが為に聞いてみた。

「その女と白蛇。何の関係があるんですか？」

品田のオヤッサンは顎を擦りながら言う。

「まー待てって。順番に話してんだからよ。え～と、そう。それで、女が殺されてから数日たったら、本当に雨が降りだした。それも凄い豪雨で、村の百姓共は喜んでたが、女を可哀想に思う輩は、この豪雨は、あの子の怨みの雨だとも言ったらしい。」

「雨が降って、霊媒師は百姓から神の様に崇められた。だが、その数日後、霊媒師は死んだ。」

品田のオヤッサンは、こっちをジッと見ているので聞いてみる。

「何故、死んだんです？」

品田のオヤッサンは、待っていたかの様に切り出して言った。

「白蛇だよ。白蛇を見たんだよ。」

「霊媒師は雨が降ってからも毎日、山の中のお社に出向いた。そんなある日、霊媒師が山から村へ戻ると、こう言った。」

「白蛇…白蛇の眼を見た…綺麗な碧色の。」

自分は、思わず口に出した。

「碧色…。」

品田のオヤッサンは話を続けた。

「霊媒師は白蛇を見た日から体を病んで、とうとう死んじまった。遂に百姓共も怯え始めて、こんな歌を唄う者も出た。」

「雨降る里の～、白蛇の～、肌は白いよ。美人さん～。雨降る里の～、白蛇の～、碧の宝石～、渡さんて～。」

品田のオヤッサンは、歌って見せた。

「碧の宝石渡さんて？」

自分は最後の一節が気になり聞いてみた。

「いやな。実は、その女、指輪をしてたらしくてな。けれど、死んだ女の指には指輪は無い。女の家にも無い。不思議な事さ。しかも、それが縁談の相手から貰ったもんじゃなくて、村に恋人がいて、そいつから貰ったもんだってんだから、おもしろい話さなぁ。」

品田のオヤッサンは、思い出した様に言った。

「いけね！酒飲み行くんじゃねーか。なっ、白蛇見たら、構わず逃げろ。メイシンも、おっかね～からよ。」

品田のオヤッサンは、急ぎ足で酒屋のある方へ歩いて行く。

自分も、だいぶ冷えてきたので、今日は早く家に帰ろうと思った。鍬などを荷車に乗せると、昨日、白蛇のいた場所が気になり眼をやった。

「白蛇……確かに眼は碧だったけど。」

雪降る季節の前のこと。冷たい風が枯れ葉を揺らす。

秋の夕暮れ。

じきに雪で白くなる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0421q/

秋の夕暮れ白蛇

2011年1月12日23時55分発行